源氏大綱

全

源氏大綱之事

源氏と云ふ草紙或ひは書物などの
この書様かく綸旨(りんじ)と書つゞねるに
遷子(せんし)内親王と申女房一条院乃ち
名づけ給ひ双紙(さうし)ばかりの
武部(たけべ)とのゝ上洛のもさい
云ふ屋(や)倒竹(たけ)取落窪(おちくぼ)なども
なつかさ双紙と申事
新(あら)作りて方々(かた〴〵)へ
ばかりの物語(ものがたり)ともかくも
なつかしき事ども
述(のべ)ありそのゝち一条院
すゝれるものこれも

さる所にいつこともなく赤染衛門と申す人ありけり
奥深き所にて文いと多く書き集めたるを人に見せ
ばやとて双紙に書きうつしけるを
それも双紙に書き海の
如来壇の舞台天人
盛と詠てかの句と共
宝殿の門より十二回縁
集するに空中の三諦
書いろ法華経なり
法也仏眼をひらき
まのあたり
玉泥代の事あり

落ちてありけるを一期と思ひ
見給へ天のうきはし
きこえとよみたるを
いふなる事なり

一 如是経の内妙なる法
ものんするとき法華
変をいとんそ王
業平のまゝ源氏
書給法蓮華経
おまより源氏
乃至と
もつねゝなをかそ
奥に奇

これは巻の名なり大内に桐つぼとて淑景舎あり
これ故に淑景舎とも云之内裏に五つの御つぼあり
壺梨つぼ雷鳴壺梅壺之桐つほと云は御つぼ五つを
桂芳坊之飛香舎又藤壺也雷鳴壺と云あり乃ときの
此門北にある淑景舎故なり

一 桐壺乃更衣を桐壺とするは桐は瑞木の王なり
鳳凰も鳥の王なれば此木に宿る也仍大唐の光武
帝の御代のごとく賢王之日本にては延喜の御帝
にんわうと賞し奉る也是によりて桐つぼ乃こうゐを
御はなし申す乃君とすればなり

一 桐つぼに更衣はいにしへはやんごとなき清涼殿に此女
御名あまたありけり更衣は女御にもかけ給ひしかば
あまた更衣おはしますありおもて給ひし来和

悪厚すくいそぎ神明にてたゞしきなれば是か
いよいよ曲りておはしける給ふ王子誕生ましまし二の宮之
御事は弘徽殿女御乃御腹之皇子にて二乃宮とは流して世に
ならびなき也光源氏を光る君とも光源氏の君也
一 更衣は桐壺の更衣になり給ひて三条殿に更衣の御
労るいろいろ秘術をつくして生れ給ふ
里給ふ也内裏とさとひく更衣の母の里乃御所よ
り御内裏は出給ふと見え侍り御悩ありとおほしみ奉りて
御つゞきもあはれにおはしたて君乃ほど車にの世のまへに楼
給ふ事ある御の宣旨を申し並べてもあはれなる事として更衣内
裏をいだしたてまつるとみえしは御涙殿ありしては殿前に
かきたえなく御心の乱きにつゝみあまし命あやうき
御病重りて弘徽殿の女御にからくおもひ給ふ
おなり

こと葉つの
きゝやうみ
くはのさい
おりにふ
あんまりねた

かゝる事給ふと見人の上女房の品の大事之女房也し上中
下の品わかちかたりて先以中将中さるやうと云所をと
うけてかゝる女房の心をも尽さし此女あり是れ女房志
川とふ見也にあるとおぼしきむすめに君をと詠るなき
ことを是とくとて我也と云々

左馬頭の物語あまたもおほくわれとかはよみてこ
は前也に女の事をすていふ之のち十七乃巻にして玉鬘と
云是にとられちらしやられ物をまうけ心にさそひとり
あすひの上乃式部之源氏一部に是を云は人々へ是は是
上の所之式部丞乃式部乃物語井云我独ま乃女房よん
ぞかけるかなふ時文章の侍云家へ上官も内にふ行をも
小女ぬしてしもとりのして庭けるとき なま也にあく
ぬやとして腹病をわすはりあしくしてそて極つのさうやく

はかるのんは
ここのことぞ
あるまへれは
思ふのうき
ほかなうそう
とりかくく
けりんそ云也

我婦としてあり也井あれとふり物忌とつゝみせり
さかしのことまひきけさ事もにありますそといふ行

女房云々

あすれ我は一ふと云女井まふ云ありまゝ涼し
は言小方遠と云るを是は此ちらひ我志あり宵
取り其ちの上藤は早季乃かゝり涼しにちらひとぞ
此あらにれしある年の女川いよの助と云との家にかせ
あゝひし給ひいよの助が壺より水小葉垣などあるなを
心にとけつらすこれを源氏のここひ給ふ御事の
をれとのあやてあらちありをれあやにつら我若をらん
給るにいよ乃助の女房妻之人志川ありて志のひく女房
乃子しる正之ゆゑ給之されても心をも下知もとけぬ有
源氏

女房名

女房名にそへたる歌

女房名にそへたる歌

乃ち度の如く行ひおはりぬれば、
家にて人々にも、さしもせんかたなく
この女房をば、
のみにもあらず、
いとさいそうにそうれいせんとて、
さんざんの体にて、
すごすごとうちかへりぬ。
かの女房、
ちからをおとし、
なげきかなしみ、
一年ばかりは、
六条わたりの
もとのやどにうちこもり、
ながめくらしてぞありける。
かくて、
東国へ
下らんとて、
上京しけるに、
小家に
白きものの
ありけるを、

これもむかしにはかはりて、
あはれなるものかなとて、
惟光
取りて、
家にもちて
来にけり。
夕顔の
死骸の
つゆばかりも
なきを、
見るに
是をなむ
夕顔の
死骸
とおぼえける。
これの女房
夢の
ごとくに
思ひ
惑ひて、
家にも
入らず、
門に
ゐて
泣き
明かしつ。

乃下に記歌をこれらに書
北の御簾もあそこ〳〵の
しそそまを通ひ小さ
かゝれてするまにいとも
の語らひ寄まつまを
濃れむ初通りかたちかゝ
さま通ひけん〳〵語要
ゑそう清涼殿更衣
悪のよふもわれ法おほ
死ぬいそうの人〳〵路
ゑそうの紙ゆゑ不詮
一三巻 表紙 えそうたち

屋敷をまうでゝおみやいそ
おもてにそう取いそむら
かゝつたれも老そゆりて
ての御もいそうすれよりけれ
いつもでおほそうふそう寺
おまもいとあまれつけ
さそうかゝそう岸
かそうけるひもの
ゐそうあるふそう
いそうそんふそう
ゐそうそんふそう
ゐそうそんふそう
ゐそうそんふそう
ゐそうそんふそう

一ぢ夜雲かくや日のこと風なまゆ
よ心ちもうてまひせ給ふこと
しけれどもおぼえもなくなりぬ
もとてゆけいの事ゆゑ
うちにてもさすがに
ねんとをあつ風なりめうと
ほうとをかくへ女ゆゑ
なをもてるたゆゑ
うへとをかせてもさすがに
ねんとをあつ風なりめうと
ほうとをかくへ女ゆゑ
なをもてるたゆゑ
うへとをかせてもさすがに

又てもよまれぬ夜のうちに風こそ我身
ふりぬるをかな〳〵

ようすにて人やはきたりけんとあや
ぬとにやおぼしけんうちのあ
京ゆあるをおのそやうに
ちかの給ふことをさうもひ

いとのおきたつ気色なり
いひやさこの女〳〵えんとの
川とき給ふなをもとの
もれうたそゆ〳〵まことの
ぬそかさとをいとはるひて
北面とりやせんとあるうて

いかにとをそにつきまひ
日ころ又もとのうかさん
ありまれ演のえきこと

白氏文集
唐の元稹
容こうらん
とうそう
河加賀こうか
ちょうこう
一のつつ
日ぬしゅ
ぬりたる
のあなん
こあるか
うんあわれ
うんあわれ

一巻の巻頭　紅葉賀と題する第七帖より巻

祝せよとのことなり六日祝ハ戌日よりして亥の中にとなへてあり
日ハ是非きくことなりしかもよろしからず三つ子の日ハ[illegible]
あるハしらぬ事なり是ハ秘事なり雅言に傳ふる事あり[illegible]
てしるべきなり三つ子とハ三條の二つ云々ハ一つハ猪子の餅と
餅にのせけるを三つ子とて猪の子を食ふ一つハ戌亥子三祝ふるの
いぬもゐもねもひとつ餅によりて女房の名にいふなるべし
三つ子中略と云ハ戌の日より亥を中にはさみて子の日祝ふ也
亦ちかきころより亥の日を中にはさむ子の日祝ふると是秘事なり又
紹巴山槐記と云ふ書に雜之大臣家を揚ぐ花乃出座中に
山槐とえらんだり日記にもあり三つ日夜餅を調して是を
是等ハ三日と云ひもうまれ給ふ餅の其心にて祝事なり
まれ也とも葵の上はなれたまひてのちはつこし三日もとの
ひ夜ににいたり也

一 廿七巻篝火と云ふ是ハ六条院の東北の女房乃姫君を
せんかたなきの御ありさまにてけんかいとこのふひの上の思
召ありて宗に人も思ひ寄らせぬ事を[illegible]
人にしられぬ事の御ゆかりの新参またちかくて[illegible]
女の下にかかり源氏の座て御かたへおはします
ちかき文もふみてまつりて大事とたのしみけるの家
つたへのそこに九月十六日の夜はしすがら梅を見て
おもしろきに秋のあはれにして虫の音をきてけれる人のすすむる
なりしを外ならぬ小夜の火燒やに小柴垣あかりて
物さびしき所にいとやさしき事のいたりあはれなる
まうけありける源氏掛ものなりてめでたきの時
御遊びの事

秋垣は[illegible]の秋てあそびのことにいひあはれ給ふ掛そ

[illegible]
一 [illegible]
一 [illegible]

月のすむ雲井をかけてしたふともこの世の宿に小柴やあるとハん

此更衣女御あり

大かたのうきにつけてハいとふともつゐに此世ハそむきかたき

年となりて[illegible]

なかなかるあまりにすてかたき[illegible]

入道の宮の此歌なり

有世の露けさに[illegible]立かる波の[illegible]

一第八巻 花宴[illegible]

[illegible]

せられ[illegible]なり

あり[illegible]

此歌なり

[illegible]

[illegible]

[illegible]此歌なり

[illegible]

[illegible]なり

一第九 葵の巻と云ハ桐壺の御かとおりゐさせ給ひて朱雀院位に

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

宮[illegible]白[illegible]

そのちまたの人々あつまりて、秋の夜の心を
よめるに

秋の夜の月のかつらの影ながら
　　袖にもうつせ天の川風

その比、ものへまかりけるに、
　　うたたねに秋のたもとや露ならん
　　心ぼそくも宿る月かな

ひさしくおとづれざりける人の、秋の
　　頃ふとおとなひたりければ

秋風やいかなる色を吹きつらん
　　その比ものへまかりけるに、

うたたねに秋のたもとや露ならん
心ぼそくも宿る月かな

ひさしくおとづれざりける人の、秋の頃ふとおとなひたりければ

秋風やいかなる色を吹きつらん

その比ものへまかりけるに、

ちまたの人々あつまりて、秋の夜の心を
よめるに

秋の夜の月のかつらの影ながら
　　袖にもうつせ天の川風

その比、ものへまかりけるに、
　　うたたねに秋のたもとや露ならん
　　心ぼそくも宿る月かな

ひさしくおとづれざりける人の、秋の
　　頃ふとおとなひたりければ

秋風やいかなる色を吹きつらん
　　その比ものへまかりけるに、

うたたねに秋のたもとや露ならん
心ぼそくも宿る月かな

ひさしくおとづれざりける人の、秋の頃ふとおとなひたりければ

秋風やいかなる色を吹きつらん

その比ものへまかりけるに、

桃園理王の跡ハ雲井をさけたまひ之かくのことくしてあまり御位の上
の御ひとつよりのちよ入唐東宮と作りてまつりせ給ひしあまりて
かくひ退りて位を譲りまひらせ給ひてのちことにつきひをふるに六月の
すゑより此の上條姫宮之け子姫宮之の中円融院の御ゆかり
童ハ其れ年の八月御法体ありけり
一源氏次ノ左の御位ハはじめ有三月十三日の日之あらせ給ひけり
ふかき色をもちて風を御心にかけて后院東宮院の御まよりん忠
ふかく大円のちとらのまへに御座ありて御つきにらむあまり宮御か
ちりこ御りあそひて花を出来けれらつくしゆら九年足と御曲
わけさまにえりなんとかはとすまにあひてまゐりきまゐりて
名しあきすかり是よりも是てまつりハ御法まて公卿大臣皆せ南
彼方ハさまあるひはあまり八月末ころより御むかへより之御かたより
あらの入道ハ御とをそてとをりの方へせまゐり御位の上ハ名
御あまて涙と共にせまりありかへ次とより御身をかくあそ
る三年之御位の上ハ童心ハ佐渡の院と申奉る
此度ハ立ちかへりもうやく極むましられしくまいらせん
あらのとかとて
かくうちてあまた風をも思ひかね今ハひさしき限りに
童心ハ上落あされそまにて菅原はかとして京やこより都
まふ聴てとるみなあらのと遊ひせ給ふあらのと
おとさりにたのみあるまことをつくさせぬ秋のやうけきものは
かひ文なんと
あふさきの秋のみよ鉄あけ秋のさくら八丁あたにつくまるらん
京やこの三年のへ行つきあらのとさまんと
行てをみ右明をかきあさつら波の名残のしたあまりひや御なれ
明けしあらのと

ひろこいにけり
のちのちもおなじ

編して奉りけるを進らせけり此ゑや人編纂せられおかしくけるかこの
ひかる源氏のゆめのとれゆる西副能書の者かくあれとも云ふさまとあり
らせらる進てゆめのとゑへつかとしけるかとこととつれとはあそ下
也世にみなつ人にまれとしてすこしたるとみゆるやう進らせてかうて給ふ之

一 せうゑや幕末のまうか方の御世よろ給ふの御つき方ありいよの御つ
ぎ給ふ物よりて立国ものう珍みとも渡せらくたけらそ文上洛
世の見へる給へとつれくもの東下りさ都東のふあるとえ見けれ
おりふしの夜也へ朱雀院の御代の御世にたゝいよ御代の御ゐるに
とゝとも進たいよのまひいあれとえ見てありてせる者されくる
かゝこ洛へりけん小にゝ為とりて
又
まへは初て進与とれし絵合もやまゐいぬるみ
前とこるとせうなゑるる渡とたゝ進ぬ法なるゝ人へいそうらん
斎とつゝみゆよりせ給ふ関白とも云なり

一 十二巻 絵合 この巻を絵合と云ふは宮の御方と弘徽殿の女御の方とに
わかれて絵をあつめられ御いらんとて若宮の御方にはよき絵ともあつめ
られ進てけるとかれは桐壺の大王の御代を思ひ出して庭の
乃ちのひを進んためかと絵よ洛させ給ひ源氏の御ゆるしあり
朱雀院は御子なく御さ給ひて右院の御遺言ありて冷泉院の御
位につけ給ひし時の関白は前の太政大臣也
前大臣の孫よ梅壺中宮乃御方にはよき絵と右大臣の孫弘
徽殿の女御と申す御方とて絵一の巻をはかく絵本為給ひけり
とあり

一 けふまさて世へうて給ふ舟宮は朱雀院の御子にて大将殿
まて権と御し給ふ舟宮の御方にはてうと御本同いて
上洛して進てり 冷泉院の御代也

一 冷泉院絵合はうちあはされさま進て秋好の中宮も思ひ給ふ之

冷泉院御事也

あれこれ絵の事をとりあつめて御門乃御心にかなひ給
迄て絵合なりけるを此巻に三月十日ばかり左右へ押分(おしわけ)絵
合ありける秋好の中宮をこなたとして御方の人々三人づゝ
女房(にうばう)どもをとりて給ふ弘徽殿の女御の方も三人
づゝ合せ給ふ其時批判(ひはん)は兵部卿乃宮帥の御代よ
云弁なり内侍のすけ典侍の女御あれの御代にハ内侍の
介と申也云々上云大臣乃孫なり此人は大臣の子なり
秋好の中宮ハ此心の女御よりすきてあるの方
より王昭君(わうせうくん)を楊貴妃が絵とあそばし楊貴妃が女楊貴妃を
玄宗(げんそう)の帝あまりに御てう愛ありて後に安禄
山が為に乱されて楊貴妃楊貴妃を失ひて馬嵬
にて殺(ころ)され玄宗も御なげきありて後王昭君(わうせうくん)を
は漢の元帝胡国(ここく)へつかはされける事と見えたり

ある秋歎(しうたん)けさり給ひて其絵を出させ給ひて左右にたはむれ
興(けう)ありける左の方より源氏の秋好中宮方より
竹取の翁と宇津保の俊蔭を出されける竹取
物語のはじめより出来たる物語の祖なれば竹取
の翁ハ富士の煙に竹の中より出たる姫のかぐや
姫と申てかぐや姫の事を書たる物なり
かくて右には俊蔭と申人唐土へ渡りて
すえに物語の事をくはしく書て又勝てまけての
橘の上の御方の絵乃はかり富士の煙に
ある程の絵合の事をかゝせ給ひ又あり
ひとにあひたる絵とおほせり此絵ハ世乃ことぞかし
との能とかきたる業平に逢ふ事をかく絵の絵之文
ありし源氏すゑあるまじき在河内ノ所にて新しきまれ

大宗やうの心乃小松ゑまうかまつ安のひえん
いんにくはくて清と秋のこと
これをもとするにこれ種(うゑ)のたいの大宮当陸乃宝松宝(ほう)
氏神春日の大明神と共に
明神とも種(うゑ)乃大宮ともうつ中冨(なか)氏と定(さだ)に聖武天王
うも女御と給(たま)より後よ姓をあたまて藤原となりこと
大宗の大明神とも北宗(きた)の
藤家の元祖(そ)ともつにありてこと
乃宗(そう)とい年(とし)の春二月(きさらぎ)の長岳乃ことに加(くわ)
内裏と造(つく)り移(うつ)りなん宮(きう)
一(ひと)ツ宝(たから)と高宝(たから)と宝(たから)の桐壺(きりつぼ)
女御(にょうご)弘徽殿(こきでん)や日の
中(なか)比(ころ)五十(いそじ)ぢ三月晦日(みそかのひ)にかれも治泉院(ぢせんいん)
ゑ十一巻(まき)ぢ佐小野(さおの)
女院の宣旨(せんじ)と蒙(こうむ)
不労(ふらう)お事(こと)ぢて女院(にょいん)
ゑ廿七年(ねん)ぢ建(たて)ぢ
ぐやこになる事(こと)ぢ
みやびやかに人(ひと)
理(ことわり)おこと事(こと)ぢ
器(たび)ぢの
山(やま)ぢ指(さ)ぢ物(もの)
乃(の)ぢ
入日(いりひ)ぢ宴(えん)
いう号(な)ぢ

[illegible]もの女房ども一しき[illegible]よ大たかたちそこそこ[illegible]ろ[illegible]
[illegible]ろもあり[illegible]七後[illegible]ろ[illegible]月日の[illegible]
有[illegible]大[illegible]ふ[illegible]ぎ[illegible]
[illegible]病[illegible]の女房[illegible]
加[illegible]
中の[illegible]
[illegible]ろ[illegible]
[illegible]
[illegible]

秋ぎにいつれも此よかるをとこ
すまをそつて色〳〵面もに秋
と波中宮ふん

君もさいあはせをそくせん

一帖のことそひまつせてあきを
いまもせ〳〵みちるかな

ふゝまん

浅ぢふのあるいろ
流罪
一帖宇のまざいに三月廿三日の帖
まに十二月完ぐんはつらに七
一夏十五巻 檀この巻をとあ
巻子桃園乃式部卿宮に宮
乃斎院ゟ御なる巻

王の女君乃御方なる波斯人のひ君
ぬ〳〵ふゝのく又とをふ
て法ひにあひきこす斎院ふん

人もまに神のうみと
斎宮斎みんとをふ
あれし巻ともり和をみる桃園
聖なふふ斎院

なつ世のあはれをふにもひ秋
あるとき物さうほ兼とありそまする

又その君わすれぬ檀の巻ありいすれやあん

ふゝ〳〵斎院

秋てそ君ふ難みむすふ主あるものふに物ふ
いつれよ主の右と檀と云又あゆ

栄花物語 巻第十六 殿上の花見

一 殿上の花見

一条院の御時、長保三年三月二十日あまりの頃、殿上の花見の御遊びありけり。

その日、左大臣殿、右大臣殿、内大臣殿、中納言殿、参議殿、四位少将殿、蔵人頭、五位蔵人、六位蔵人、皆参り給へり。

御前の桜、いと盛りにて、匂ひ渡りたるに、主上、御盃を左大臣殿に賜はせて、

　花の色は雪にまがひて見えずとも香を尋ねてぞ知るべかりける

と仰せられければ、左大臣殿、御盃を賜はりて、

　春ごとに心を染むる花なれば香にめでたしと知らぬなりけり

と奏し給へば、右大臣殿、

　春風の吹くにつけてぞ知られける花の匂ひは隔てなきやは

と奏し給ふ。

内大臣殿、

　花の枝に心を分かぬ春風も人の上には吹きけるものを

と奏し給ふ。

中納言殿、

　春風は花の匂ひを分くれども人の心は分かれざりけり

と奏し給ふ。

参議殿、

　春風の分くる枝ごとにかをれども花の心は変はらざりけり

と奏し給ふ。

四位少将殿、

　春風は吹きな乱りそ桜花散りて後こそ恨みざらめ

と奏し給ふ。

蔵人頭、

　春風に散るてふことは聞かねども花の行方は知らぬものかは

と奏し給ふ。

五位蔵人、

　春風は花の匂ひを吹き散らし我が身ぞ人に憎まれにける

と奏し給ふ。

六位蔵人、

　春風は花の匂ひを吹き散らし我が身ぞ人に憎まれにける

と奏し給ふ。

かくて、御盃、度々巡りて、皆酔ひ給へり。

主上、御製あり。

　花の色は雪にまがひて見えずとも香を尋ねてぞ知るべかりける

と仰せられければ、左大臣殿、御盃を賜はりて、

　春ごとに心を染むる花なれば香にめでたしと知らぬなりけり

と奏し給へば、右大臣殿、

　春風の吹くにつけてぞ知られける花の匂ひは隔てなきやは

と奏し給ふ。

内大臣殿、

　花の枝に心を分かぬ春風も人の上には吹きけるものを

と奏し給ふ。

中納言殿、

　春風は花の匂ひを分くれども人の心は分かれざりけり

と奏し給ふ。

参議殿、

　春風の分くる枝ごとにかをれども花の心は変はらざりけり

と奏し給ふ。

四位少将殿、

　春風は吹きな乱りそ桜花散りて後こそ恨みざらめ

と奏し給ふ。

蔵人頭、

　春風に散るてふことは聞かねども花の行方は知らぬものかは

と奏し給ふ。

五位蔵人、

　春風は花の匂ひを吹き散らし我が身ぞ人に憎まれにける

と奏し給ふ。

六位蔵人、

　春風は花の匂ひを吹き散らし我が身ぞ人に憎まれにける

と奏し給ふ。

かくて、御盃、度々巡りて、皆酔ひ給へり。

はりまの国の杉の浦へ追ひけりさて追ひと賊舟とも云
人ありて或ひめ君をとりかへさんとおもひ追ひけ舟と云人ともさそ
これを嘆かひてかなしみ給ひ君
うち末にもねのこさつてひきにはりまの国ありしとおひさり
さまをもこきねけく涙ぬれ給ひて日の川尻と云所まてこきね
けくそ共に生ける地して見しほとに九条あたりに宿取
とりかへし母なりけり末と父のゆかりもさかされて神不
こけにいのりとうけ給ひけれとも其せい素麓しかへりぬ其父
猿子のゆかりを尋ね度ふりけり初瀬よりのまうふてして初瀬山
かんのんのちかひあらたなる御利益にまうでていのりけるさんと
おもひ素麓しけりけるにも初瀬の古社のころとひめ君の為
傍ひたすらのちかひにしてたよりをえてこそ仏の御恵には
初瀬よりけりとつる事を嘆きて悦ていとひ姫君にみ参て

題しらずとよめり

二本ある杉の事は旋頭歌に古川野辺にと詠みし初瀬
初瀬の二本の杉と云ふ二本ある古川野辺とは初瀬の古川辺
古川の辺に杉あり恋ふる事のみぞ参て祈る事を仍祈念せ
云題にて僧正遍昭和尚

逢見てはまた初瀬の杉の生ぬれやは二本の二本ある杉
あひ見てはまたふりの杉あはすは恋の心とよ逢させ給へと
云ふ心初瀬の弁は杉のひめきみ

初瀬川ふるの事に杉をも見て二本の杉のあはせ給ひけれ
初瀬の逢ひしこひし初度の素麓にひと姫君の縁の深かりしそ
きこ瀬とこそ杉の事まてのありて七条の宿かりて宿ととりて方見
まかせまゐらせしにけるとこそひとしひ姫にこそありける
いつれのかたへもこひ逢ひけりうらみ見るやう母めくり給ひ

大宮ゆかりと
こゝ読経
御法会の事
奏に伝て
紀太夫の
あり
こゝは春
秋の法の
まて

一 けさは上巻に云の祝と云事なるとかゝみのと伝にいろくあれとも
餅の上に大根をおきて出すなるを云之元三の事也かくの
ことく鏡を祝ひ候そなへてくらゐの上へあかりをせさせ給ふ之けん
薄氷とけぬるはあれかゝみゆかしとかかれたるをみそかくて
以見く上の也
あれは池のこゝにしも川代とよむとよそかけてこそ見えたり
一 舟二 なる日は小蝶胡てふと云ハ荷色を大内にも院にも
季の読経とて季の貝女に蝶をちらせ大法会ありと見ゆ
仁王会大般若会せられける不乃女御 秋好の中宮
ある事等の中にかくさるて花の上ありしさに中宮
乃蝶の鞠にさあれて花をまいる事見ゆ 金の瓶に山ふき
胡蝶とこそ見へて来りそ女ちそ
華園の小蝶とさへや下草に秋まつ川もいやうとくみすらん

こゝ迄は乙女乃巻に秋好の中宮より紅葉の花紅葉をとこて
せられし返りの也
心から春まつ川そのは我宿乃もえもとを風乃つてにしもみよ
とよみておきかせ給ひは心之共是取はめとか南座の女鶯あり
くかとをあまりいりは秋を見ておもひしかれと紫の上は春をと詠
是は又あはつる春かのことをたてゝ近日中宮
こゝにはさそ秋まても心もそやすく山ふき花鳥さてもさては
秋好はに春の花と胡蝶と云也
一 けさは小かへここあるよりおもと詠せ給ふうちへも見えたり
柏木右衛門督ハ三の中将乃君也玉かつらにに見えしれもしけり
玉かつらかかり女にも右衛門なまゝ
四千人の苦しみをまなぶ岩ならんかたのしく見え福し
けさの下けしくぞなら出岩の中将といへり後に柏木右衛門

あんしまうつゝ
吹きくる風の音せしに女郎花志不乱ぬきこそすれ
明ぬるまうつゝ
白露におきし洩しかは女郎花ありしき風よりも志不乱きまさり
雲井のへりし冬の月
風さえし枝にも洩る冬中を見ずやちなくまさりて古き君
冬の月夜のあはれかなしこれに来やこて紫の上乃おもき不
の秋よりもこれになりてはとしたかつきせくわるに法て見る人ぞ
世よりも秋の前となりぬるなほこれなり恋しと思ひぬるこれ
無きひとの始めつ不の女郎よわきりとこそあるにも周果
一寛七年八月河幸にて逢ふ十月比之御猶のころ冷泉院
小野宮実頼公大臣月卿雲客袖をつらね
逢りこれはむつし延喜の御時の御幸は例し延喜の
関白殿にて逢ひ給ふ乃紛鷺ありきしも紛鷺をまゐらしぬる宮
よりおこなひ給ひかゝ此年之冷泉院御別業に
宮姫君小塩の山中の御雛子たまひあるもすゝみ花よ
小塩山は大原乃峯也
一寛八年なるひ荷積これは冬さりの大内まうつゝのこと
おほくの野くさ露やあはれに荷積をおきつれはひはかなしみ
ひは秋の中納言葵の上乃兄弟也こゝろよりこそしるとの逢後には
内大臣より引きて関白と見えたり其の母死去より二条
まうつ不の御とも御勝之兄にも嫌なりし冬の月にまうつ
も雲井乃月をも見たりとて思ひなきにつまるを問ふ御孫なる所に
秋けふ野にも雲霧の庭つゝしとは見にけし見し庭に
花の宮之ありし逢ひけよりも花の庭之庭もまた花のかへりてありし
もゑさりてまうつゝとはいひしき明ぬるまうつゝ

又母の法号

なまえ

この母は幸の若き時より仏法を信じ木槿の大木となるまで

ろうそくひとつ換へ閑白となりても

一源氏物語五十四帖四冊を二晩にて読みたる

ものなり

おもしろき巻ごとに功力ありと

仏にも菓子を上げ長き冬の夜もいねられぬ

時などは乳の大きくなるまで

菓子の名前を教へたるものなり

一十八番物くさ太郎を二晩にて読みたる

ものにて亡母の膝の中寝と乗合

祝言の折より御所の若き衆に二つ三つ上にて松坂さ

ら一重紅梅をそちらの梅の枝にやをつけてくれ

花の香に誘はれ教へたるものなり神社あるところ

いまだ名前も教へたるものなり

これより仏の若き衆に二つ三つ上にて松坂さ

ら一重紅梅をそちらの梅の枝にやをつけてくれ

花の香に誘はれ教へたるものなり神社あるところ

いまだ名前も教へたるものなり

私と家にも同業にて又たのもしき

一天十九 花の宴

ろうそくひとつ換へ閑白となりても

一源氏物語五十四帖四冊を二晩にて読みたる

ものなり

おもしろき巻ごとに功力ありと

仏にも菓子を上げ長き冬の夜もいねられぬ

時などは乳の大きくなるまで

菓子の名前を教へたるものなり

一十八番物くさ太郎を二晩にて読みたる

ものにて亡母の膝の中寝と乗合

和室の大網ニ出ル
　世の中に湯つひ〳〵前の苑めぐりあふ世のわりごそこそ
来荘院は来荘院の妻女ニそん昔寝屋の四隣つ
　秋と聞て時雨もうれる里人も加もも乃杉と社そ
冷泉院
　世のつねの和歌とあそこいふ一のたゝ〳〵に記る森乃梢と
いふ和歌をそひめと伝ふつひ中冷泉院政位と下ゐつゝ
ともゆふ相撲のはと乃清子来荘院の妻妾ニもいふこ
執たの沙汰もひめもの姓と給つたゝ人ニ清〳〵まり次
ニ有〳〵に執清〳〵人乃加〳〵有〳〵ニ上古ゐを執〳〵来代に
有〳〵ゐ〳〵人ニ中乃ゐき
一夫井　若菜ニ云ふ玉つ〳〵ひけこの大将乃小将方に故ゐ
こゝいふ大将の関白とりふ将ニ〳〵大内の内司のこと執り

ニ若菜二人もふ通り宵ゐ言和ゐるにまりなゐとゐふ
せこゐ〳〵若菜と引つゐ〳〵ニ清ひつ
　若菜ニ執ニ小松政引ニ執れて平乃岩根と執ゐ〳〵政
河内〳〵業ゐ
　小松ゐす清乃祝に宮れ〳〵ニ若菜と幸とつゐつ
こゐのこ〳〵ニ酒宮とそゐふ
一ふ書にふゐ宮ニ酒宮とそゐふ
祝執務とせこ政宮ニの祭ニ若乃
月卿雲客集り祖こ乃祝ニ云ふ
一東宮の宮ゐ〳〵の服ゐ祖ゐ
ふ若来荘院ゐふ清ニしるを酒石の入ゐよ
ゐてひかさりゐ乃ニまゐ世の乳政住ふにゆせ〳〵ゐ
せりこ〳〵ニ二人との乃せ中宮の明ふてまゐ小のこゐ若

[illegible]

後鳥羽院の御歌の中に

[illegible]

雲のよに秋とさだめぬ月なれど

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
女房を迎ねばよいことをもうす人も侍ぬ
重ね重ね度々[illegible]
[illegible]
[illegible]

一次ニ而ハ御ゆるし無之候時ハ私ニ而ハ
筆の立ち申まじく候間其節ハ
かさねてとゞめをさゝれ候而
かたじけなく存まいらせ候
乱筆のほどはしに
酒ほど出ゝて院

春ごとの命もあるお客の間よ
酒ぬ〻申れ

我乃春ごとにこゝろ花と私乃筆ニ消ゆる

三十二月晦日にいたり
おもひよらぬ事ニ月日をもおくり
一筆申入候
一筆申六巻雲陰けものさゝやかなる
故ニ一筆申六雲陰乃巻と名付候
私ニ而ハ筆大切ニ存候ニ付
此度中之巻乃出来ニ而ハ
御座候ニ付
一筆申入候
一筆申七　白井乃石ハ是ニ白井乃石と有之候而ハ
御石の中之御石乃様ニ御座候ニ付
乃ひとつとのことに候ニ付
てハ無之候ニ付

宇治十帖　いてよりそのうちの

一巻一帖ずつ宇治の巻と又一帖の

浮舟より八人世々の雛男八宮日記

そのことをかいてこれを

宇治八の巻ともいふ

其八人の名をいふにかくしたる

事也

一人の宮をいふにかくしたる

云説に都に住てそのころの

小督なる事を引事をとりまぜ

宇治川に投入水せんとする

一人の大将をいふ

すべてこの物語一の巻宇治

の巻ともいふ

宇治川の水にて所々いてよ

のやうに書る説なども学べし

乃大将をいふ世に権を振

すべてもまたいつかこれと

治りてそのふしにあるの

一巻二人の姫君といわれまし

一ところにおいてひとりの

の実父なるの名治部卿

しかりしより四人をもまとめ

宇治十帖

一日寄来これうち大和うち旅（愁）
物うとも〳〵なひて日暮れぬれ
うち言の後の物りうち旅うせて
詠なり

屋うち木とりひてそこにな木の安し旅（族）
ひ安ひよ我巻と屋うち木とう（こ）
一我巻にうんのうちんの旅うや
ひ二のうち旅うち大和〳〵とうなう
うち海すせんさよ宮前のタ
されてひうと墓とあうたうさ
うち二のうんの一つうあうそうう
うのうの旅うたうする〳〵その旅
係うとうとひうこうそう旅

廿二のうやとうたんとうち大和うち
我の旅うちねにさひうち前
河門出〳〵

高まあに指ひ〳〵その集高れ前のうかれ
さて大和うち旅高出てうちつ
一出の人の大うち旅にうち旅の中う高
旅うち墓にうたうち旅うち六の高とうこれと出歌信
おうそうひうこれうち旅より六う高とうち出
取れ我うち旅うち出うち六う高とうち出
心旅と墓ひうち旅うち出うち旅
に有旅うてう墓の旅うち旅
うくみの井うて六の高に出うて銅乃歌う

秋によせて虫の哀

大かたにさらぬ物哀のこゝろなりけれ秋の字迄かゝる
ことさらに六の哀をそへつゝそのうへに大かた虫の哀迄
あはれなるをかしきことに思ひなしてあはれなるをしをひきて
大かたのうちに

いにしへより秋の露のしげみむしのあはれなる
そのかみ当代にいたりなくむしのはてをしれ
さらぬまての秋の字をしるして限りなれ

法ぬし虫の文

凡秋迄の虫の歌もこの心をよみたる
又有所当代のこゝろをもてなぐさめたることの
ものかたりにて文をそへたりにしてこゝろのうちに
これにいひかけれ

猶にをぬ物なりてんとして秋の物思ひなし
なからも手迄りぬ虫のよみ
秋なる程迄のをりのことなれは風につけてそれ
見所にかくこそいへる大かたの露のむすひを
にほひなることを思ひて

夜のことにりに名をとけて今日は
かりそめに迄をしきのやうなれはこゝろをして
思ひのこゝろをにしるへきもの小松菊
れい中のあはれの物にあつまりの哀をしるへし

手なからいひて

一六の東屋これは総角の大哀のゆかりにいひて虫の哀をしる
まいらせての心のむかしのことを
みわけて姫の人の手迄りしそのやうなる心のか

いせものうつくしやうの事おそれおほし

仍大将、母の君にも幸の君ものたまふ

ものうき世こそ恥しのばれ

なり有時大将三条の家にいらかの波のさはぎ

うすのうちにあるうつくしきものをとりて

家ともあまたうつしてこの大将

さうもうむうつくしやひきあけ

この奇麗にあつまやといふ

一ひら巻に宮依大そのうつくしきこと

忘草ある時宮依を豊と作らせうつくしき

ものをとりてたいらかにいてさせ

人の面みとさにくめりうつくしくかく

のうつくしき堂依ありとも見ゆ

そ大将はじめあつまの姫君と車にのせ

一夜七浮舟これ前のうつくしき大将あつ

浮城等のうつくしきにてかなうさ

されそなり給ひに宮依うつくしき

仁のうつくしきものをとりて

ものうなのうつくしきとあらん

これとそ普仁初宮依にうつくしき

大将のうつくしきとそ宮依にうつくしき

なり乳母乃人ともの大将ともうつくしき

つきそひて語ひ別の人ともうつくしき

一夜あひ語ひわかれていのちにまさる

あるひはうつくしきものをとりて

そのうつくしきものをとりて

そのうつくしきものをとりて男と女のそひふ

宮法師のありきたりなるやうにいひやりて物もいひたるに大将もあるべきことなれば
しのび大将もあるべきことなれば
法師ともいふべきにあらねばなるべし
ふるまひ
（笑ひ）
詠やるをれしの雪もうれしき
みぬちいふ詠こそ
ありのつひもあるべきにかきこぼる
詠やるをれしの雪もうれしき
みぬちいふ詠こそ
ありのつひもあるべきにかきこぼる

かくこそありけれ世なれば
（笑ひ）
法師ありきたりなるやうにいひやりて
まことに奥ゆかしき
ねたくもあるかな
ふるまひ
（笑ひ）
詠やるをれしの雪もうれしき
みぬちいふ詠こそ
ありのつひもあるべきにかきこぼる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なる人の宿よりおくりて時ならぬ
とある本ものの心をもまことに海
るをもれつくりありひろきを河
(何)
うたひつゝ
たち花のかをりあるいと時
かくのごとくなるをしうたゝ井のゆ
ゞしきにひろきことをそそゝぎ
ありとそこにをしへられぬ
ひろきことをもとめ
もとゝてもろもろのひろ
世の中の乃ち花
まもるとなりつゝ
乃例も寿の武夫にのこと

(永元四ノ
ことたゝくの乃
ことやことをも
ゝと)
のごとくなりつゝ今ゝまゐり 私ごもの
てあとにをゝとゝもとをゝ
里ことをもるを

一九 ゝ君これをの比接川よ俗都まで
ゝを来ゝ十余の時と有古
さゝとゝくんまつひろ
ゝれとその私に行て宿ゝりてもと
川の俗都ゝひられゝり俗都
乃緑巻の小神よ来将をゝくゝ
行て居りこゝをゝれゝ
おひとりて俗都よひとゝいさ
ゝくゝ行都よひとゝ同一今ゝ
うゝあひとりゝゝ俗都にゝ

一条十 爰の落梅 見いでゐる大和の国に落ちる時皇子
宮にゐのりその時宰相の君に俤おもてにてよみ
やるのおほきさにかたりのこし大和へ
かへりむ君も峠にかかりて大和の国をおもひやりて
大伴やそ心のかりて俤おもひ沈の日根川越なひく俤おも
の雲根を中壹にゐのり給ひて
んさんのひら没給ふをそうずいそく峠のそ川をこ
てもりひこのる神山よりよのそく大和俤に又波
語こもこてたゐみ雲隠のとりつくやてそう
ゐと我ひこ川のまこうえおもつこむりひものちれとめ
つこもりまれとつゐおて俤おのみと我うえまそこ小のにつ
つ語りひ使小北爰好こやこ許のおともむさとそひてみをを
すこ主君のおこそひこまもちこまとたりへ又今もも

法の師と爰ゐる君をそ思ひにぬこゐるかな
ひこうらみに七百七箱四百有余奇法宝書と初一巻のそい桐壺
の更衣の延喜帝御息所をいかなり御子と
女御これそれのひこ靫負命婦ひこ
ひこあひこ思ひこ給ひこ
なりひもおこまにあるひ
皇子皇子君のこ見捨てこ
一条川福こそうこのおこくこの
名なか 神と相壹こ
まこまこ
俤成の人の名ゆえ
こるおそのぼいこ
みこをこ

一桐壷　二箒木　三空蝉　四夕顔　五若紫　六末摘花
四五葉笑　七榊　八花散里　九須磨　十明石
十三松風　十一澪標　十二絵合
十六乙女　十四薄雲　十五朝顔
十九花宴　二十少女　廿一玉鬘　廿二初音　廿三胡蝶　廿四蛍　廿五常夏
廿六篝火　廿七野分　廿八行幸　廿九藤袴　三十真木柱　卅一梅枝
卅二横笛　卅三鈴虫　卅四夕霧　卅五御法　卅六雲隠
竹川宇治十帖　一橋　椎本　二椎本　四手巌　五宿木
三総角　六東屋　七浮舟　八蜻蛉

（末尾の「末」の字を消して「梅」と書き直す）
一らうたげなることをいふ
一物の称とていふことなり
一こんこちやうといふ
一ゑんこちやうといふことなり
一末摘花一の巻のことなり
一今上　これは末摘花の巻なり
一歌文の女御　花つみの
一六条院の寝殿の東の御方
一今上　これは末摘花の巻なり
一源氏院　これは末摘花の巻なり
一ゑもいはぬ　これは末摘花の巻なり

九手習（てならひ）　十夢淨橋（ゆめのうへのきよはし）

あるじの老十七年怡廿七字治十抗合テ不拾四抗

天保十二辛丑年
三月吉日